

# 国 語

## 1 学習指導の改善・充実

### (1) 教育課程編成に向けた視点

教育課程の編成に当たっては、各科目の内容を十分に理解するとともに、生徒の実態や小・中学校との系統性に配慮して、学校として、どのような国語の能力を身に付けさせるのかを明確に意識して取り組む必要がある。

その際、共通必修科目「国語総合」と選択科目との関係、選択科目相互の関係等に留意しなければならない。例えば、「A」を付した科目には、課題探究的な指導事項があることや、「現代文B」と「国語表現」を同時に履修した場合、話すこと・聞くこと、書くことの比重が増すことなどである。

また、総則に示されている次の点について確認することも重要である。

ア 言語活動の充実を図る

イ 義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設ける

ウ 見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動を行う

### (2) 学習指導の改善・充実の視点

国語科においては、言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みはこれまでと同様であるが、このことを再確認し、指導の現状を省み改善を図る必要がある。その際には、「教材先にありき」ではなく、目標（身に付けさせたい国語の能力）を実現するのにふさわしい言語活動や教材を設定して指導するという視点が大切となる。

また、思考力・判断力・表現力等を育成するために、各教科等において言語活動を充実することが総則に明示されており、国語の指導はこのことにも資することが求められる。

ところが、読むこと、その中でもとりわけ古典を教材とした指導において、教師が黒板に重要事項を板書しながら説明し、生徒は説明、板書された内容を書き写し、その内容を知識としておぼえているだけといった授業が一部に見受けられる。

このような指導を改善するためには、学校や生徒の実態に応じ、例えば、次のような具体的な工夫をする必要がある。

- ・「一斉授業」だけではなく、ペアで意見を交換する、小さなホワイトボードに書きながら話し合う、カードを使って話し合う。
- ・「教師が説明する」だけではなく、生徒が説明する、立場を決めて討論する、ポスターセッションをする、プレゼンテーションをする。
- ・「生徒は板書をノートに写す」だけではなく、資料を読んで分析して、レポートや論文にまとめる、新聞にまとめる、ICTを活用してまとめる。

## 2 評価方法の改善・充実

### (1) 学習評価の改善・充実の視点

国語の指導の質を保証するためには、全ての教師が学習評価の意義を十分に理解し、学習評価を指導の改善に生かすという意識をもち、目標に準拠した評価を、観点別に、評価規準に基づいて行うことが重要である。

指導と評価の計画には、このことを明示するとともに、「言語活動の充実」や「見通しを立てたり振り返ったりする学習活動」などにも配慮し、評価方法も含めて示すようにする。

## (2) 評価の対象について

評価の対象となるのは、学習指導要領の内容の(1)に示される指導事項のみである。この指導事項が、国語科の各科目において身に付けるべき能力ということになる。

また、内容の(2)に示される言語活動例は、既に指導していることであり、評価の対象とならないことに留意する必要がある。

指導事項（内容の(1)）	言語活動例（内容の(2)）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・これから指導すること。 （高等学校の国語科で身に付けるべき能力）</li> <li>・単元における目標となる。 （身に付けさせたい言語能力となる）</li> <li>・評価の対象となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既に指導していること。 （これまでの学習で身に付けていると考えられる能力）</li> <li>・単元における目標とならない。</li> <li>・評価の対象とならない。</li> </ul>

## (3) 評価の観点について

他教科の学習評価では、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の4観点を設定していることが多いが、国語においては、これまでと同様に「国語総合」の領域による能力の観点とし、「関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」、「知識・理解」の5観点としている。

これは、国語科において、言語による「思考・判断・表現」と言語の「技能」とが密接、不離の関係にあり、個々に分けて評価することが困難であることから、これらを統合し、領域別の3観点到に再構成したことによる。

従って、実際の評価に際しては、例えば、「C 読むこと」の指導の場合は、「関心・意欲・態度」、「読む能力」、「知識・理解」の3観点で、他教科と同様に4観点分の評価をすることとなる。これは、「話す・聞く能力」「書く能力」の場合も同様である。

<p>ア 「関心・意欲・態度」の評価</p> <p>「関心・意欲・態度」は、主体的に学習に取り組む態度を評価する観点であり、国語の各科目が対象としている学習内容に関心をもち、自ら学ぼうとする意欲や態度を身に付けているかどうかを評価するものである。従って、各科目の全ての指導事項と対応する。</p> <p>イ 「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」の評価</p> <p>「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」は、基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等とを合わせて評価する観点であり、「国語総合」においては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域が対応する。</p> <p>ウ 「知識・理解」の評価</p> <p>「知識・理解」は、基礎的・基本的な知識・技能を評価する観点であり、「国語総合」においては、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が対応する。</p>
---

(4) 評価の各観点に対応する学習指導要領の指導事項について

国語科における評価の各観点に対応する学習指導要領の指導事項について、次に示す。

評価の各観点に対応する学習指導要領の指導事項（内容の(1)）					
	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解	
国語表現	<p>ア <u>話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。</u></p> <p>イ <u>相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。</u></p> <p>エ <u>目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。</u></p> <p>オ <u>様々な表現についてその効果を吟味したり、書いた文章を互いに読み合ったりして、自分の表現や推敲に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。</u></p>	<p>ア <u>話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。</u></p> <p>ウ <u>主張や感動などが効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫して書くこと。</u></p> <p>エ <u>目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。</u></p> <p>オ <u>様々な表現についてその効果を吟味したり、書いた文章を互いに読み合ったりして、自分の表現や推敲に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。</u></p>			<p>カ <u>国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などについて理解を深めること。</u></p>
現代文 A			<p>ア <u>文章に表れたものの見方、感じ方、考え方を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。</u></p> <p>イ <u>文章特有の表現を味わったり、語句の用いられ方について理解を深めたりすること。</u></p> <p>エ <u>近代以降の言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、言語文化について理解を深めること。</u></p>	<p>イ <u>文章特有の表現を味わったり、語句の用いられ方について理解を深めたりすること。</u></p> <p>ウ <u>文章を読んで、言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。</u></p> <p>エ <u>近代以降の言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、言語文化について理解を深めること。</u></p>	
現代文 B	<p>エ <u>目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。</u></p> <p>オ <u>語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。</u></p>	<p>エ <u>目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。</u></p> <p>オ <u>語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。</u></p>	<p>ア <u>文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。</u></p> <p>イ <u>文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。</u></p> <p>ウ <u>文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。</u></p>	<p>オ <u>語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。</u></p>	
古典 A			<p>ア <u>古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。</u></p> <p>イ <u>古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。</u></p> <p>エ <u>伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。</u></p>	<p>イ <u>古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。</u></p> <p>ウ <u>古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。</u></p> <p>エ <u>伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。</u></p>	
古典 B			<p>イ <u>古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。</u></p> <p>ウ <u>古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。</u></p> <p>エ <u>古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。</u></p>	<p>ア <u>古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。</u></p> <p>エ <u>古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。</u></p> <p>オ <u>古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。</u></p>	

※表に記載した各科目の指導事項のうち、下線を施した箇所が、各観点に対応している。

※「関心・意欲・態度」は、全ての指導事項が対応していることから、本表では記載を省略している。

(5) 評価方法について

評価規準を用いて評価する際は、言語活動ができているかどうかを表面的に評価するのではなく、目標に掲げた、身に付けさせたい国語の能力が身に付いているかどうかを、言語活動の状況を通してみることとなる。

(6) 評価の手順について

学習評価を行う場合の具体の手順及び各手順における留意点を次に示す。

**手順1 当該単元の目標を設定し、単元の評価規準を設定する**

- ①目標を重点化し、学習指導要領の指導事項から一つを取り上げる。
- ②評価の観点別に目標を設定する。
- ③「関心・意欲・態度」の目標は、単元の中で最も重点を置く目標の文末を「しようとする」と改める。

**手順2 目標を実現するのにふさわしい言語活動、教材を取り上げる**

- ①まず、目標を実現するためにふさわしい言語活動を設定する。
- ②次に、目標を実現するためにふさわしい教材を選定する。

**手順3 当該単元の授業で実際に用いる具体的な評価規準を設定する**

- ①言語活動の中身は含めずに評価規準を設定する。
- ②「関心・意欲・態度」は、単元の中で最も重点を置く目標の文末を「しようとする」と改める。

**手順4 当該単元における指導と評価の展開（評価方法を含む）を計画する**

- ①指導と評価の展開を計画する際、生徒の学習活動における「行動」と「記述」を評価の対象とする。
- ②評価方法は、次の表に示す「観察・点検」、「確認」、「分析」の3段階で設定する。

評価対象 段階	行 動	記 述
観察・点検	<p style="text-align: center;"><b>行動の観察</b></p> <p>学習の中で、評価規準が求めている発言や行動などが行われているかどうかを「観察」する。</p>	<p style="text-align: center;"><b>記述の点検</b></p> <p>学習の中で、評価規準が求めている内容が記述されているかどうかを、机間指導などにより「点検」する。</p>
確 認	<p style="text-align: center;"><b>行動の確認</b></p> <p>学習の中での発言や行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」する。</p>	<p style="text-align: center;"><b>記述の確認</b></p> <p>学習の中で記述された内容が、評価規準を満たしているかどうかを、ノートや提出物などにより「確認」する。</p>
分 析	<p style="text-align: center;"><b>行動の分析</b></p> <p>「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて「分析」することにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。</p>	<p style="text-align: center;"><b>記述の分析</b></p> <p>「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などを「分析」することにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。</p>

### 3 学習評価の具体例

#### (1) 単元の指導と評価の計画の作成例

「現代文B」における単元の指導と評価の計画の作成例を次に示す。

科目名	現代文B	単元名	小説を読む
単元の目標	(1) 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わおうとする。(関心・意欲・態度) (2) 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わう。(読む能力) (3) 文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てる。(知識・理解)		
言語活動	(1) 登場人物の心情の解釈を、グループで話し合うこと。 (2) 内容や表現の仕方について、感想を述べること。		
教材	「こころ」 夏目漱石		
単元の評価規準	関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
	・文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み、他者の考えを参考にしながら読み深めようとしている。	・文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み、他者の考えを参考にしながら読み深めている。	・文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てる。
次	具体的な評価規準と評価方法		学習活動
1	<b>【評価規準】</b> ・文体や修辞などの表現上の特色をとらえている。(知識・理解) <b>【評価方法】</b> 「行動の観察」		○ 文章の構成や表現上の特色をとらえる ・文章を読み、脚注等を参考にしながら大意を読み取るとともに、表現上の特色をとらえる。 ・登場人物の関係や場面の状況をノートに整理する。
2	<b>【評価規準】</b> ・文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み深めている。(読む能力) <b>【評価方法】</b> 「行動の観察」「記述の点検」		○ 人物の心情を読み取る ・文章を読んで人物の心情を読み取り、ワークシートに記入する。その際、文章中の記述を根拠とすることに留意する。
3	<b>【評価規準】</b> ・文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み、他者の考えを参考にしながら読み深めている。(読む能力) <b>【評価方法】</b> 「行動の確認」「記述の確認」		○ 話し合いをして自分の考えを深める ・前時でワークシートに記入した意見を、各グループにおいて発表する。 ・話し合いの中で、自分や他者の考えが深まったり発展したりしたことを、ワークシートに記入する。
6	<b>【評価規準】</b> ・文章に描かれている人物の心情を表現に即して読み、他者の考えを参考にしながら読み深めようとしている。(関心・意欲・態度) <b>【評価方法】</b> 「記述の分析」		○ 学習の振り返り ・単元を通して学んだ、他者の考えを参考にしながら読み深めた文章に描かれている人物の心情について、自分の考えをまとめる。

指導事項を重点化し、学習指導要領の指導事項(内容の(1))のみを基に作成します。

単元の目標を具体化し、観点別の具体的な評価規準を書き入れます。

言語活動は、すでに身に付けた事項であるため、目標や評価規準には入りません。

この数字は、実際の指導時数ではなく、学習のまとまりを「第〇次」として表したものです。

自分の意見を、根拠を明らかにしながらまとめ、話し合いに活用するワークシートを作成します。

他者の考え		自分の考え	
		考えの深まり	
	「私」の心理の説明		「私」の心理の説明
	本文における根拠		本文における根拠

2 「他流試合」「要塞の地図」という比喻によって表される「私」の心理はどのようなものか。

他者の考え		自分の考え	
		考えの深まり	
	「私」の恐怖の説明		「私」の恐怖の説明
	本文における根拠		本文における根拠

1 「相手は自分より強いのだという恐怖の念がぎざし始めているのです」とあるが、「私」が感じた恐怖を具体的に説明せよ。

現代文B 話し合いワークシート 『こころ』

なお、この単元の指導と評価の計画例で示している「次」は、1単位時間を基準とする指導時数ではなく、学習のまとまりを表したものであり、実際の指導と評価の計画の作成に当たっては、学校や生徒の実態に応じて適切な指導時数を設定することになる。

#### 4 観点別評価の進め方

##### (1) 観点別評価の進め方

観点別評価を行う際、まず、「おおむね満足できる」状況（B）を基に、生徒がその状況を実現しているかどうかを判断する。次に（B）の状況からの高まりが見られた場合を、「十分満足できる」状況（A）と評価する。なお、そこに至る過程において、どのような状況を「おおむね満足できる」状況（B）や「十分満足できる」状況（A）と判断したかという事例を、国語科の教員の間で共有することが大切である。

一方、「努力を要する」状況（C）と判断した生徒に対しては、個に応じた、どのような具体的な手立てを講じて（B）の状況に導いたかなどについて、国語科の教員の間で指導事例を共有することが大切である。また、このように事例を共有することは、教員間で協働する機運を高め、指導と評価の工夫・改善を進めるきっかけになる。

##### (2) 観点別評価を踏まえた指導の改善

これまで、各単元で評価の総括を行わず、定期考査によって複数の単元の評価を一括して総括することが多く見られた。そこでは、指導の時期と評価の時期が離れてしまったり、定期考査でみることができると（例えば「読む能力」や「知識・理解」など）に評価が限定されてしまったりする傾向があり、指導と評価の一体化を図ることができず、評価を指導の改善に生かしくなかった。

指導と評価の一体化を図るためには、各単元の指導において、評価規準に基づき授業の中で適時に行われている評価を、観点別に総括することが必要である。また、このことは、単元の指導について振り返ることになり、指導の改善につながるのである。

## Topic

### 義務教育段階での学習内容の確実な定着

今回の学習指導要領の改訂では、学校や生徒の実態等に応じて、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための指導を行うことで、高等学校段階の学習に円滑に移行できるようにすることが求められています。そのために、例えば、中学校での学習状況などの生徒の実態を早期に把握して、次のような取組を段階的に行うことが考えられます。

#### (1) 学習機会の活用

- ア 週末課題や小テストなどの学習機会を活用する
- イ 学習内容の定着が十分ではない生徒を対象として放課後に学習会を行う

#### (2) 単位数の増加

- ア 「国語総合」の標準単位数を増加して、十分な指導時間を確保する

#### (3) 学校設定科目の設置

- ア 生徒の実態に即した、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目を置く